校長室だより～燦燦～ №７９５

５回のなぜ

2023.7.18

日本を代表する自動車メーカーに、トヨタ自動車がある。そのものづくりの原点、組織に浸透した強さの源泉はどこにあるのか。以前から気になっていた。つい半年前まで乗っていた車がトヨタ車だった。走行距離３８万kmに迫ろうとしていたが、エンジンは無事のままで手放すことになった。日本車はすごい。トヨタ車は別格だと思った。

トヨタの現場では、まず疑問をもてと教わる。そのために、「なぜ？」を５回繰り返す訓練を徹底的にさせられる。例えば、「昨日は予定の台数を造ることができませんでした」というと、「なぜだ？」「この機械が故障したからです」「なぜだ？」「油漏れがしたらしいです」「なぜだ？」そのへんからもう分からなくなって口ごもっていると、「馬鹿もん！」と雷が落ちる。仕方がないから、今度は故障した機械の所へ行って、「なぜボルトが緩んだんだ？」「なぜ油が漏れたんだ？」と、「なぜ？」を５回、６回と繰り返すうちに、「そうか、ここがまずかったのか」と真因にたどり着く。そこで手を打つと、二度と同じトラブルは起きない。

一番まずいのは、ボルトが緩んでいるのを見つけたときに、ただ締め直しただけで、済ませてしまうことである。「なぜだ？」と追及して真因を解消しないと、後でまた緩んで油漏れを繰り返してしまい、大目玉を食らうことになる。

これは、トヨタの話だが、世の中には、緩んだボルトを締め直すだけのようなことが多いように思う。学校もそうである。校舎設備だけではない。人の気持ちに対してもである。誰々がこう言っている。だから、こうすればよい。

そうではなく、誰々がこんなことを言っている。「なぜ、そんなことを言うのだろう」「本当にそう思っているのだろうか」と「なぜだろう」という考えをもたないと、人の気持ちに寄り添うことはむずかしい。人は、思っていることを話すとは限らない。話したことが正しいとは限らない。その言葉の真意を考えようとする姿勢がないと、うまくいかないことが多くなる。

「なぜだ。本当にそうなのか」「もしかしたら、こうではないのか」相手の立場に立って、じっくりと考えてみる時間が必要である。そこでは、「なぜ？」が必須となる。なぜと考えれば、何々だからと考える。その思考過程が重要である。

トヨタの「なぜ」に代表される飽くなき追究心から学ぶことは多い。約３８万kmもお世話になった車が、徹底した「なぜ？」から造られたものだと考えると、納得できる部分が多い。教育の場でも、「なぜ？」の姿勢は必要である。そのことをトヨタから教わった。